

Q5 学習障がい（LD）の生徒にはどのような支援を行えばよいのですか？

学習障がい（LD）の生徒への指導の中心は、学力の補充です。文字や数字などがどんな認識をされているのかを把握しながら、その生徒に応じた指導方法を工夫していくことが必要でしょう。無理に教え込もうとすればするほど、生徒は苦痛を感じて、さらに自信を喪失してしまいます。

また、学習障がいの生徒は、他者の表情や会話に含まれる言外の意味やその場の雰囲気などが分からない場合があるため、友だちとの人間関係がうまくつけれないこともあります。そのため、ソーシャルスキルトレーニングと呼ばれる社会生活上の基本的な技能を身につけるための学習を行い、よりよい対応の仕方を学ぶ学習も必要です。

学習面・対人関係面での大切なことは、生徒の困難な状態に気付くことです。生徒がどんなことに困っているのかを見極めることから、支援が始まるのです。大切なことは「診断名・障がい名」ではなく、「行動の見方」と「対応の方法」を検討することです。

【学習面の能力に関する支援の例】

- <聞く>・・・声の大きさ・抑揚・間の取り方，要点は短く，視覚的な手がかり，個別の指示 等
- <話す>・・・一問一答式，見える手がかり，順序立て，楽しい会話 等
- <読む>・・・文字の大きさ・並び方，一行ずつ，ふりがな，分かち書き（文章題も分かち書きにする工夫を） 等
- <書く>・・・ノートの使い方，マス目・補助線，量の調整，想起するための手がかりになる声かけや資料の提示 等
- <計算する>・・・マス目，広めのスペース，具体物，ゲーム形式 等
- <推論する>・・・問題文の理解の補助，具体物・図 等

【行動面での困りに関する支援の例】

- 注意されがちでしかられることが多い→スモールステップで評価して，成功体験を多く積む→評価が増えていき，自信をもてるようにする 等
- プライド，自尊感情に配慮する→個別に指導する 等
- 教師が，学習のできない，問題のある生徒として見ないようにする 等
- 感情的に対応するのではなく，冷静に対応する 等
- クラスの中で孤立させないために，理解のある生徒と同じグループにする 等
- 安定できる人，安定できる場所を確保する 等

生徒に「できないこと」を気づかせるより、「できること」に気づかせ、できることを伸ばしていく支援をしていくことが大切です。



Q6 注意欠陥（如）多動性障がい（ADHD）とは、どのような障がいですか？

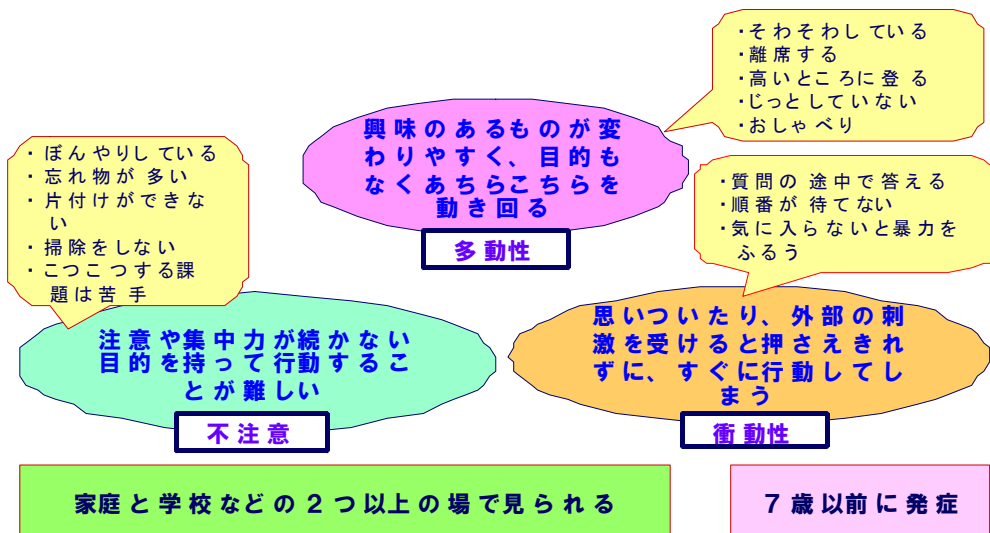
「落ち着かず、じっとしてられない」「人の話を最後まで聞かない」「順序立てて物事が考えられない」「何かと忘れ物が多い」「約束や決まりごとが守れない」「待つことが苦手」「せっかちですぐにいらいらする」等の状態がみられる生徒はいませんか？

このような困難な状態を示す生徒の中には、注意欠陥（如）多動性障がい（Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder）と言われる生徒たちが含まれていることがあります。小・中学校の2.5%の生徒（－文部科学省 平成11年7月「学習障害児に対する指導について（報告）」より－）に見られると言われていています。当センターに寄せられる相談の中でも、ADHDの生徒の相談が占める割合が高くなってきている傾向にあります。

不注意であったり、落ち着きがなかったりという面は誰にでもあります。しかし、ADHDの生徒の多くは、それらをコントロールすることが極端に苦手なのです。そのために、「注意や集中力が続かない」「思いついたり、外部の刺激を受けると押さえきれずに、すぐに行動してしまう」（不注意）「目的を持って行動することが難しい」「興味のあるものが変わりやすく、目的もなくあちらこちらを動き回る」（多動性）「思いついたり、外部の刺激を受けると押さえきれずに、すぐに行動してしまう」（衝動性）といった行動をとってしまいます。

ADHDのほとんどは、7歳以前にあらわれます。一見、社会的な適応がよくなっているようでも、基本的な症状はそのまま続いていきます。中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されています。しかし、生徒の状態から、保護者のしつけや担任の指導が悪いからと誤解されやすく、本人や保護者、担任が非難されることもあります。ADHDの症状がある生徒の保護者と十分に話し合い、ADHDによる障がいがあるのか、他に原因があるための行動なのかを見極めることが大切です。

また、ADHDの生徒は、知的障がいがあると思われることがあります。その理由として、学校の成績が極端に悪いことが原因として考えられます。しかし、診断基準では知的障がいのないこととされています。教師や保護者の注意を理解する能力は十分にあるのです。成績が悪いのは、集中力を働かせることが困難なためで、内容が理解できていないわけではありません。また、LDや高機能自閉症を合併している可能性も考えられます。



Q7 注意欠陥（如）多動性障がい（ADHD）の生徒にはどのような支援を行えばよいのですか？

ADHDのある生徒は、年齢とともに課題が変化してきています。

例えば、幼児の頃は多動性、小・中学校段階は、LDとの併発、高等学校段階は、叱られ続けたことから引き起こされる自己肯定感の欠如による二次的な障がい（暴力行為、不登校、引きこもり等）が考えられます。（詳しくはQ11）

早いうちに周囲の大人がADHDの特性を理解し、得意なところを生かし、苦手なところを補うような対応をしていく必要があります。ADHDの生徒のよい行動に対しては、大いにほめ、達成感を味わわせ、自信をもたせるようにします。そうすることで、人に対する肯定的なイメージを抱き、二次的な障がいを減らすことができます。

ADHDの生徒の言動を「わがまま」「自分勝手」と決めつけるのではなく、長所を探して認めることが第一の支援です。

ADHDの生徒への基本的な対応として、座席を教師の近くにしたり、気が散る原因となるものを離したりすることで、生徒が授業に集中しやすい環境を整えます。また、行動の善悪について、生徒自身が自覚がないときにはすぐに叱らないようにします。生徒自身が落ち着き、行動の善悪が判断できる状態になったところで指導することで、自尊心が傷つくことを防ぎ、さらに困難な状態を引きおこすことを防ぐことができます。

ADHDの生徒には、「わかる授業」を心がけることが一番の支援であるとも言われています。生徒が「できた」「わかった」と思えることが、自己肯定感を高めていくことになるのです。そのために、生徒が集中でき、取り組みやすい授業を心がけることが大切です。そうすることで、ADHDの生徒だけでなく、すべての生徒にとって集中でき、取り組みやすい授業になるのです。ユニバーサルデザイン化された授業を目指していくことが大切です。

ユニバーサルデザイン化された授業

授業の時間を短く区切る

50分間苦手な生徒も10～15分なら集中できる、これを利用して授業を短く区切るという発想。
 ・一問一答形式のクイズ形式やゲーム性のあるものなどを取り入れる。
 「短い時間ならがまんできる」
 「がまんすれば好きな学習ができる」

授業の見通しを持たせる

予定は変わる場合もあるが、急な変更に対応しにくい生徒が少しでも早く心の準備ができるように、見通しを持たせる。
 ・通信等で週の予定を知らせる。
 ・朝のHRで、その日の予定を確認する。
 ・授業のはじめに、授業の内容を知らせる。
 「次に何をやるのか」
 「何をがんばればいいのか」(授業のめあて)

授業のパターンを作る

授業の流れや内容をできるだけ同じパターンにする。
 ノートの書き方や課題のやり方など、みんなが同じやり方で取り組むようにする。同じルール。
 繰り返すことで次第に定着し、安心して課題に取り組める。

学年間、教科間で統一することを心がける。

二次的な障がいを防ぐ上から、特に多動性・衝動性が強い生徒には、自分を受け止めてくれる人の存在が必要になります。学校生活において、自分を受け止めてくれる教師や友だちの存在は何より大切です。ADHDの生徒が誰かを頼れるようにしたり、周りの誰かが支えていく環境をつくってあげれば、生徒は自己肯定感をもつことができ、二次的な障がいの防止につながるのです。

Q8 自閉症とは、どのような障がいですか？

自閉症は、環境や親の養育態度が原因ではなく、何らかの中枢神経系の機能異常が原因とされています。

最近「自閉症スペクトラム」という言葉も使用されるようになってきました。これは、知的発達に遅れがある自閉症から知的発達に遅れのない高機能自閉症やアスペルガー症候群等を、連続した一つの障がいとしてとらえた広い概念です。

自閉症には、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわるという3つの基本的特性があります。

また、これらの3つの特性に加えて、感覚知覚の過敏性・鈍感性、特異な認知特性（シングルフォーカス^{注1)}、セントラルコヒーレンス^{注2)}等）を示す場合があります。

注1)同時に二つ以上の事柄を意識することができず、一つの事柄に意識が集中してしまうこと。

注2)いろいろな情報を統合して全体像を把握する力。

具体的には、以下のような様子が見られます。

- ・人と目を合わせて会話をしたり、相手の表情を読み取ったりすることが苦手
- ・場の雰囲気を感じ取ることが難しかったり、話のやりとりがかみ合わなかったりする
- ・同じところやものをじっと見続けたり、決まった道や同じ順序で行動したりする
- ・ちょっと触られただけで、たたかれたように感じたり、音やにおいに敏感（逆に、音やにおいに鈍感）だったりする
- ・講義を聞きながらノートを取ることが難しい
- ・普通ならば不要だと見過ごす情報を一つ一つ受け止めるため、全体の概要が理解できにくい
など

自閉症と診断されても、自閉症の特徴のあらわれ方の強い人と弱い人がいます。同じ人であっても、自閉症のいくつかの特徴のうち、ある特徴は認められるけど別の特徴はほとんど目立たないということもあります。また、知的発達の状態にも個人差があります。



参考文献

- 発達と障害を考える本 「ふしぎだね！？自閉症のおともだち」
内山登紀夫監修 諏訪利明・安倍陽子編（ミネルヴァ書房）2006
- 高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち—特性に対する対応を考える—
尾崎洋一郎・草野和子・尾崎誠子著（同成社）2005
- 自閉症教育実践ガイドブック
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著（ジアース教育新社）2004

Q9 高機能自閉症・アスペルガー症候群とは、どのような障がいですか？

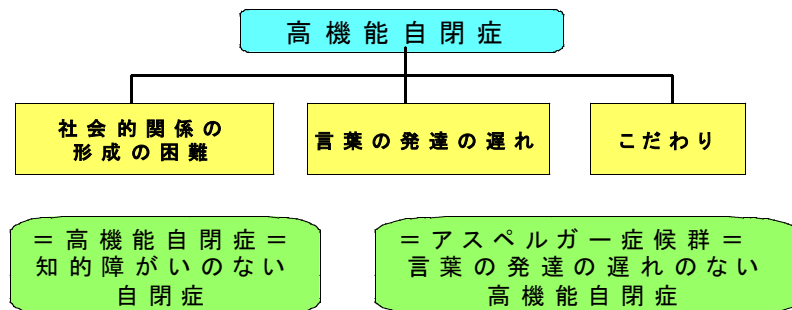
「スポーツ等のルールを守ることが苦手なことが多い」「周りの雰囲気を読んで行動することがむずかしい」「机やロッカーの整理整頓されていないことが多い」「運動が苦手な不器用」「自分の興味があること以外無関心」「自分の気持ちを相手に伝えることが苦手」「授業変更や予定変更があると落ち着かない」等の状態がみられる生徒はいませんか？

学習の理解にはほとんど問題がないのに、人とのつき合いが苦手な、自分勝手と思われる行動や発言の多い生徒はいませんか？

このような困難な状態を示す生徒の中には、高機能自閉症・アスペルガー症候群といわれる生徒たちが含まれていることがあります。小・中学校の0.8%の子どもにみられるといわれています。－文部科学省 平成11年7月「学習障害児に対する指導について（報告）」より－その子どもたちのほとんどが高校進学をする現状から、高等学校においても同程度の割合で在籍していると考えられます。

Q8で説明した自閉症の中でも、知的能力の高いものが高機能自閉症とされています。言葉の発達に遅れがあり、コミュニケーション能力が育っていないために、他人の言葉や場の雰囲気が読めずに、興味や関心の幅も狭いことも特徴です。さらに、高機能自閉症の中でも言葉の発達の遅れを伴わないものがアスペルガー症候群とされています。

高機能自閉症の特徴



① いくつもの情報を同時に判断し処理することが困難

- 相手の立場による言葉の使い分け
- 相手の言葉の背景にあるもの
- 自分の言葉を相手はどう感じているか など

② 他者との社会的関係が困難

- 暗黙の了解事項の理解が難しい
例) あいさつの仕方
- 社会のルールや常識が理解できにくい
- 相手の気持ちを気遣うことが難しい
例) 体の特徴・年齢を聞く
- 相手の気持ちや意図するところの理解が難しい
例) 秘密の話

③ 言葉を字義通りに理解する

- 言葉を発音通りにとる
例) 絵を描いて下さい→「え」をかいてしまう
- 言葉の裏の意味の理解が難しい
例) 「お母さんはいますか」→「(外出中でいなくても)お母さんはいます(存在してます)。」
- 冗談が通じない
例) 浦島太郎だったよ
- 「言外の意味」や「言葉の裏の意味」の理解が難しい
例) 「猫の手も借りたい」

④ あいまいでいい加減な世界がもてない

- 具体的な表現でないと分かりにくい
例) 「最近どう」

Q10 高機能自閉症・アスペルガー症候群の生徒にはどのような支援を行えばよいのですか？

「わがまま」「自分勝手」といじめられたり、からかわれたりしないためにも、孤立しない環境を作っていくことが必要です。生徒の得意分野で能力を発揮できるようにしていくことで、自信がもてるようになります。高機能自閉症の特性を理解し、環境を整備し、社会性を身につけるようにする支援が必要です。

【生徒に寄り添う姿勢】

- 得意なこと・苦手なことを把握する
- 「自分のことをわかってくれる」→安心感
- 短所を直すことより、長所を伸ばす
- 「自分が認められている」→自信・達成感・成就感
- 大人が生徒の困難な状態に気づき、寄り添う



【生徒が自信をもてる支援】

- ①できた！という達成感や成就感をもたせる
 - ・ こだわりを生かす
 - ・ 特性を利用する
- ②いじめから守る
 - ・ 望ましい生徒像を限定しない
 - ・ いじめからの保護
- ③社会常識を教える
 - ・ TPOに応じて、具体的な言動を教える
 - ・ 改善すべき点を具体的に告げる
 - ・ 主語、目的語をつけ、具体的な表現で、省略しない完全な文章で伝える
 - ・ 代名詞は指示する名詞とともに伝える
 - ・ 肯定的表現・用語で伝える
 - ・ 命令形・大声は避ける
 - ・ キーワードを知らせる

【環境を整備する工夫】

- ①教室での環境を整える
 - ・ 不必要な情報の排除
 - ・ 見通しのある生活の提供
- ②教師自身の接し方を見直す
 - ・ 共感的な見方
 - ・ 情報の提示は一度に1つ
 - ・ 要点だけを伝える
 - ・ 断定的に言う
 - ・ 肯定的に伝える
 - ・ 誤解させない表現で伝える
- ③保護者の心を支える
 - ・ 良好な親子関係こそが、生徒の情緒安定につながる

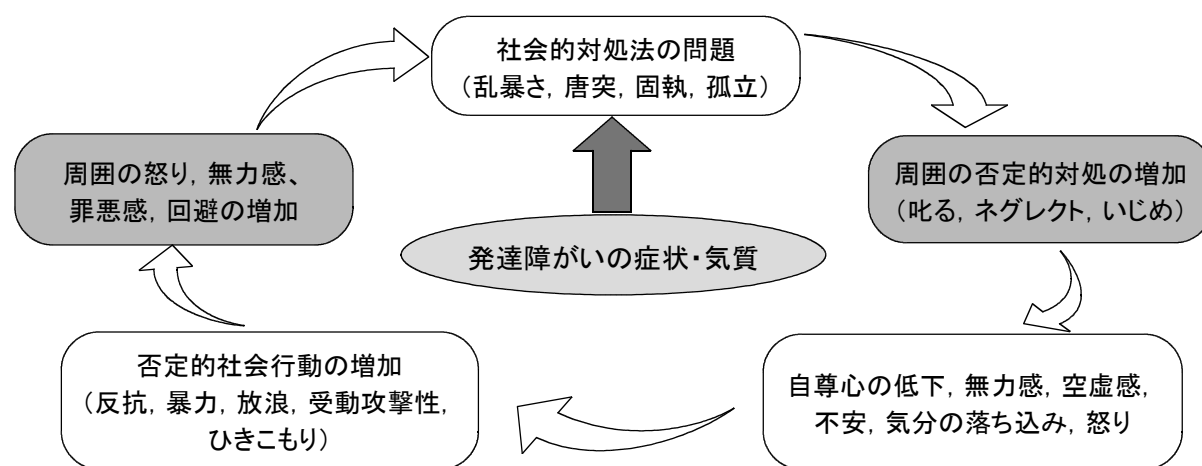
教師と高機能自閉症・アスペルガー症候群の生徒との間で、約束ごとをつくり、ルールを守る態度を身につけさせていくようにして、集団行動に慣れさせていくことが必要です。高機能自閉症・アスペルガー症候群の生徒に対して、学習や仲間づくりなどの目標を立て、担任だけでなく学校全体でサポートできる体制を整えておくことも大切です。

Q11 二次障がいとはどのようなものですか？

《 二次障がいとは 》

発達障がいのある児童生徒が周囲の人や集団との相互作用を通じて、下図のような悪循環に陥ってしまうことがあります。

発達障がいは「生活障がい」であるとも言われます。発達障がいのある児童生徒は、幼い頃から度重なる失敗をとがめられ、傷ついています。このような状況を繰り返すことで自信をなくしてしまいます。例えば、不用意な発言をしたことで、周囲から嫌がられ学校の中で孤立してしまうことがあります。そのため、本人は「疎外感」を感じるようになります。自分と周りの人を比べ、自分のよくない部分ばかりが気になるようになり、落ち込み、ある種の「劣等感」を感じてしまうようになります。自分の特性を理解できる年齢ですから、自分をだめな人間だと思うようになり、ひねくれた思いや自暴自棄な態度、自己評価の低下につながっていくようになります。このような生活を繰り返すことで、無力感を抱き、何もしなくなるなど周りの人との溝がますます広がってしまう「抑うつ」の状態となってしまいます。下の図は、これらの状態が繰り返される様子を示したものです。



【二次障がい出現の悪循環】

発達障がいのある児童生徒は、生活していく中で各年代（年齢）において特有な発達上の困難な場面に度々直面することになります。この困難な場面を過ごしていく過程において現れる様々な行動が二次障がいなのです。実際には、自尊心の低下、無力感など児童生徒本人のひどく傷ついた精神的な傷跡が、発達障がいの特性や関連するそのほかの特性と混じり合った姿として現れているわけです。

思春期・青年期と呼ばれる10代から20代が、発達障がいの特徴的な症状である子ども型の障がいが徐々に姿を消していき、外的要因が加わり、自身の精神的な問題として現れる大人型の障がいが増加してくる移行期と言われています。発達障がいの子どもの二次障がいを発現しやすい年代は、10歳から17歳くらいまでの思春期です。この思春期後期に当たるのが高校生の年代であり、この時期の発達課題は「自分探し、自分作り」の作業になります。このような思春期年代を経て大人としての自己実現に向けて成長していきます。

二次障がいとは、時間の経過とともに受ける外傷的な経験や周りのものとのかかわりの

傷跡ととらえることができます。しかし、外傷的な環境や出来事がいつも二次障がいを引き起こすとは限りません。逆に、有効なストレス対処法や社会性を獲得させてくれるきっかけにもなることから、周りの人の理解と適切な支援が求められます。

障がいのある児童生徒も日々の生活を見直すことで、困難な状態は軽減できます。

《 広汎性発達障がい(PDD:Pervasive Developmental Disorders)の場合 》

PDDの子どもが学校で不適応を生じやすい理由は、他者の気持ちを理解しにくいという特性があげられます。背景には、「心の理論」が形成されていないことにあるようです。通常「心の理論」は4歳までに獲得する機能だと言われています。しかし、PDDの子どもは10歳以降でないと獲得されないとも言われています。思春期は、友達を求める時期でもあります。PDD、中でもアスペルガー症候群の子どもたちが、周りの子どもたちの気持ちに気づき始める時期でもあります。友達とのかかわりにおいて、字義通りに理解しようとするPDDの子どもたちにとって、周りの子どもたちが使う隠語や含みのあるコミュニケーション、本音と建て前の使い分けはきわめてわかりづらく不可解で、理解に苦しむものなのです。その結果が、仲間を求めて後を追いついたり、見当外れな行動を繰り返すことによって仲間はずれになってしまうことになるのです。これらのことにより、被害的な感情や怒りが強まり、周りの大人が気づかなければ、登校を渋るようになっていたり、家庭に引きこもったりするようになってしまいます。

このような危機的状況を防ぐには、周りの大人が気づき、上手にサポートしていく必要があります。適切な支援をしてくれる教師、友だち、カウンセラー等のサポーターの存在に気づくことができれば、自分で他者との折り合いをつけるスキルを学ぶことができます。その結果、他者とかわって生活する肯定的な感情を持つことができるようになります。

《 注意欠陥(欠如)・多動(性)障がい(ADHD)の場合 》

ADHDの場合、幼少期からの対応が大きく関係することから、時期をさかのぼって説明をします。ADHDの子どもにとってもっとも危機的状況は、学童期にあることが多いようです。この時期に正しいスキルを身につけることで、衝動的な行動や不注意を軽減し不適切な言動をカバーすることができるようになります。しかし、現状はそうではない場合も多くあります。幼児期から逆境的な体験をした子どもは反応性愛着障がい(RAD:Reactive Attachment Disorder)、反抗挑戦性障がい(ODD:Oppositional Defiant Disorder)や行為障がい(CD:Conduct Disorder)などの二次障がいを早い段階から示すようになります。特に、反抗挑戦性障がいはADHDの幼児児童にはもっとも一般的な二次障がいです。

これらの障がいは、他者との関係性にかかわる障がいであるため、二次障がいが増大すると仲間集団から孤立したり、いじめの対象となったり、または大人から厳しく叱責されたりといった事態に陥ってしまいます。

ADHDの児童生徒の特徴として、相手の承認を求め、それが得られれば非常に喜びます。しかし、先に示した厳しい事態になるととても傷ついてしまいます。そして、焦りと怒りでそれが悪循環となり、不適応行動が増加してしまいます。ADHDの場合、適切な支援をできるだけ早い時期に行うことで二次的障がいは大きく軽減するということになります。

思春期・青年期の児童生徒は、自分自身の障がいの理解が進むことで、自分の中にAD

HDをどう組み込んでいけばよいのかを考えます。自分自身の状態に気づいた児童生徒は、大いに苦しんでいるということでもあるのです。周りの大人はそのような困難な状態を少しでも早く察知し、適切な支援へとつなげていくことが必要なのです。

反社会性の進行を次に示します。この行為障がいへと続く様子を「DBDマーチ」と呼んでいます。



引用・参考文献

○月刊「実践障害児教育」Vol. 418

2008年4月号

○大人のAD/HD【注意欠如・多動(性)障害】

田中康雄監修(講談社)2009